

令和元年10月1日

内閣官房長官 菅義偉 様

一般社団法人 日本茅葺き文化協会  
代表理事 安藤 邦廣

## 大嘗宮の茅葺きについての要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

当協会は、茅葺きの文化と技術の継承と振興をはかり、もって日本文化と地域社会の発展に資することを目的として活動し、文化庁の選定保存技術認定団体でもあります。

天皇即位に際して執り行われる大嘗祭の大嘗宮の屋根については、1300年以上の長きに渡り、茅葺きで葺かれてきました。前回、平成の大嘗祭においても、悠紀殿、主基殿、廻立殿の主要三殿は、茅葺きで葺かれ、その伝統は守られてきました。ところが、このたびの令和の天皇即位にあたり、経費節減を理由に、その主要三殿も全て板葺きにすると2018年12月に宮内庁より発表され、その方針に沿って工事がすすめられているところでもあります。

これに対して、当協会は、新聞記事等において、大嘗宮が茅葺きであることの重要性と今回もその伝統を守ることを強く訴えてきました。2019年2月には、宮内庁よりその点についての意見を求められ、大嘗宮が茅葺きであることの重要性および、当協会として、茅の材料と職人の確保について、工期に間に合わせる用意があり、全面的に協力することを申し入れました。また、経費節減の点から、古来の葺き方であり、簡易な葺き方でもある、茅の逆葺きとすることを提案しました。

さらに、同様の趣旨の要望書を2019年3月20日に宮内庁長官宛に、3月23日に官房長官宛に提出しました。それに対して、3月26日、宮内庁より、逆葺きの耐風性、防水性について、近年の事例が少なく、十分な検証を行うことができないという理由で、板葺きで葺くことから変更はできないという回答でした。

その後、工事の受注額が公表され、それによると当初の予定価格よりも大幅に少ない額で発注されました。

このような経緯の中で、2019年5月30日に「茅葺き文化伝承議員連盟」が設立されました。このことについて、8月に当議連より、菅官房長官に対して、当初の予算よりも工事受注額が大幅に軽減されたことから、現在工事中の板葺きの上に、茅の逆葺きを施すことが、大嘗宮の茅葺きの長い歴史を守り、また、板葺きが下葺きとなっているので、逆葺きの耐風性、防水性についての懸念も払われるという提案をし、検討が要請されました。なお、それに際して、当協会では、板葺きの上に逆葺きとした場合にかかる費用として、悠紀殿、主基殿、それぞれ1棟あたり、約1000万円と試算しました。また、それに必要な茅と職人の確保と工期2週間で実施することの全面的な協力の用意があるという資料を議連に提供しました。

それに対して、宮内庁の山本信一郎長官は、9月12日の定例記者会見で「新しい工程を追加する余裕はない。遅れは許されない」と述べました。さらに、菅義偉官房長官は、9月27日の官房長官記者会見で、議連の要請に関連して大嘗宮を茅葺きにすることについての記者からの質問に対して、「時間的關係、宮内庁中心に対応を協議して、そうした要望には応えられない」と回答し、また、板葺きの上に茅を葺くことについては、「宮内庁によれば、職人等の不足によって難しい」との回答で、さらに、茅は収穫の儀礼を象徴するものであり、持続可能性のある日本社会と環境に配慮した社会のシンボルでもあるという側面からの検討はされなかったのかという質問に対しては、「こうした意見も踏まえて、職人不足ということから判断をくだした」という回答でした。

このように、宮内庁は、当初は逆葺きに対する検証の時間がないこと、さらに、板葺きに加えて茅葺きという新たな工程を追加する余裕はないことを理由にあげ、一方、菅官房長官においては、職人の不足、という回答に終始しています。

現在、茅葺き職人が不足していることは事実であります。しかしながら、当協会としては、当初より、大嘗宮の主要な建物である悠紀殿、主基殿を茅葺きで葺くための職人を十分に手当する用意があること、および、必要な茅は確保できることを申し入れてきたにもかかわらず、大嘗宮を茅葺きにできない理由として、職人の不足をあげることは事実と反します。さらに、宮内庁は大嘗宮を茅葺きにすることに工程的な余裕はないと繰り返していますが、そもそも、大嘗宮の茅葺きの歴史をやめることへの本質的な問題に対する回答はまったくされていません。日本の歴史文化を守るべき立場である宮内庁が、天皇即位の儀礼という最も重要な行事のひとつである大嘗祭において、その茅葺き屋根をやめるという重要な変更を、経費削減という理由だけで説明し、また、当協会や関係諸団体から大嘗宮の茅葺きの大切さを訴える多くの声があがっているにもかかわらず、それに対しては日程的余裕がないという説明に終始しています。これは、日本の歴史文化を軽視する判断と言わざるを得ません。

大嘗祭の茅葺きは、収穫の儀礼を象徴するものであることは言うまでもありません。その屋根を逆葺きとすることが古来よりの習わしであり、それはまた、茅の穂先を表にあらわすことで、稲穂を神に捧げることを示す方法であることに他なりません。今回の茅葺きにおいて、より簡易な方法として逆葺きとすることを提案していますが、それ以上の意味が茅の逆葺きにはあるのです。

日本各地で農業を営み、茅葺き民家に暮らす人、それを支える職人や地域社会の人達、それらの茅葺き文化を守る多くの人達は、今日の社会が直面する課題、資源の循環する持続可能な社会や生物多様性の保全、を目指す中で、茅葺きを見直し、これを未来の文化として受け継ごうとしているのです。

その茅葺き文化の象徴のひとつとも言える大嘗祭から茅葺きが失われるということは、はかりしれない大きな文化的損失と言えます。

再度、大嘗宮を茅葺きで葺くことの伝統を守ること、すなわち今回施工されている板葺きの上に茅の逆葺きを葺くことについて、再考賜りますよう切にお願い申し上げます。

敬具